

第17回日本ボランティア学習学会第1分科会



第1分科会は、「若者が主役のボランティア活動～世代を超えて」をテーマに、11名の参加者(高校生9名、大学職員1名、団体職員1名、教員1名)のもと、森 照代理事がコーディネーターとなり、辻利則氏(宮崎公立大学ネットワーク研究室学生)の発表、及びそれをもとにグループディスカッションが行われた。

まず、事例として、宮崎公立大学の辻利則氏、宮崎公立大学ネットワーク研究室学生から携帯電話で高齢者や障がい者等の情報を共有する緊急時対応システム「ぴーすけカード」の開発と「ぴーすけカード」の活用を広めるために取り組んでいる学生ボランティア活動の紹介及び災害救援ボランティア支援について、①ピースケのシステムについて、②サロンピースケ、③教育機関との連携、④高齢者、障がい者との連携の観点から報告を受けた。

「ぴーすけカード」は、高齢者や障がい者等が所持し、災害時の情報等の情報を受け取ること、また、提供することだけが目的ではなく、「ぴーすけカード」が活用できるように地域の人たちの支援体制を作ることが目的である。大学生が中心となり様々な支援活動を通して、高齢者や障がい者、高校生、子ども、地域住民とのネットワークを作ることが大切であること、地域防災、災害弱者となる高齢者、障がい者、子どもたちを地域全体で支えることの必要性が問われており、高齢者・障がい者間の交流を推進するだけでなく、異年齢間の交流を進めていくこと、そのための活動の場を公園など地域におくこと、低年齢からの教育が大切であることが報告された。

それらの課題を解決し、地域づくりの活動へと広めていくためには、地域のネットワークの核として若者の存在が必要である。そのため、若者が地域のネットワークの主役となるアクションプランを考えることが求められている。このことから、3つのグループに分かれ、地域活動に取り組むための環境整備をしてほしい若者と若者の支援を活動したいがどのような支援が求められるか知りたい大人たちとの思いをどのようにつなげていくのか、ディスカッションを行った。

その話し合いの中で、お互いの思いを伝え、つなげていくためには学校・家庭・地域が連携して若者の活動を支援していく体制の整備をボランティア団体と学校が協力して企画・運営していくこと、地域の人たちと交流する機会と場を自治会と協力して設定していくことが必要だという意見が出た。

(森照代)